阿久津喜弘教授の思い出
Memories of Professor Yoshihiro Akutsu

立川　明 TACHIKAWA, Akira
● 国際基督教大学
International Christian University

まだ，殆どの事務室が本館に収容されていて，大学紛争のたけなわの60年代の終わり，私は初めて阿久津先生にお目にかかった．二つの機会を通してであったと記憶する．一つは，本館の事務室の中で確か教務課長（Registrar）として働かれた姿を拝見したとき．もう一つは教養学部の上級科目，Introduction to Communication Arts and Sciences で学生として阿久津先生と対面したときであった．先生はまだミシガン州立大学での留学を終えて帰国，間もなかった．

後者の機会を覚えているには理由がある．当時，私は教育学の学生で，思弁的なことばかり追いかけていた．そこで，上記の科目の冒頭で，科目名のArtsとは何ですか，コミュニケーションに使うあれこれの具体的な手段，テクニックのような内容ならごめんを被りたい，と生意気な質問を発した．これに対して阿久津先生は実に穏やかな口調で，「ICUの学部の英語名は何ですか，College of Liberal Artsでしょ．そのArtsのことです．」と回答された．見事につぼをついた答えであった．そのせいか，当初に予想していたよりも，このクラスの内容の断片は生き生きと記憶に残った．ある日の課題は「群盲象をなでる」という比喩は，コミュニケーションの観点からは，どのような事態を指し示しているのか，という問いから出発した．友人のW君は錯覚説を提示し，それに対して私が，「触ったものを触ったままに表現しているうちはよいが，それを何何であると断定するから問題になる，つまり判断の問題だ」などとやり返して，少しく議論となった．阿久津先生は意外にもニコニコと笑っておられて，正解らしきものを何も提示されなかった．何年も後で反省したが，どうも我々二人の反応はともにかなり的外れであったようである．もう一つ，同じクラスでクロード・シャノンの情報コミュニケーションに関する数学モデル，というのを教えていただいた．コミュニケーションを数学的に解釈するなど全く眼中になかった私には驚きであったし，そのころからそうした素養を持つ先生にかすかなコンプレクスを抱くようになり，そうした感情は亡くなられた後も続いている．

教員が兼務するRegistrarの職は今では廃止されているが，熊谷惟明氏が確か後を継がれたので，阿久津先生があるいは最後の兼務者かも知れない．まだコンピュータ化などほど遠かった60年代の登録は，学生数は今の三分の一であったとはいえ，大きく複雑な仕事であったと思う．本館の一室で，立ったままうつむいて登録資料に目を通されていた姿を，今でもはっきりと記憶している．

ただし，私が赴任した1978年以降も，先生は教養学部長室を初め多くの役職を遂行されたので，後の姿がはじめての姿とたぶんにオヴァーラップしているかも知れない．それでもRegistrarとしてのその姿の記憶が，今ではすべて教室となった本館二階の南側の部屋のいくつもが，かつては教務その他の事務に使われていたことを，ときおり思い起こさせてくれる．私にとっては，その姿は阿久津先生の個人についての記憶を超えて，何かICUの原風景となっている．

先生の専門の一部はコミュニケーションであったが，遥かな後輩の立場とはいえ，同じ教育学科で長くただ二人だけの教養学部卒業生として，現実的にコミュニケートしていただいた内容は多い．その具体例をあげることは控えるが，先生は多くの場合実に要領よく問題点を整理し，教示して下さったが，何度かきわめて厳しい批判を私に向けられた．普段は実に温和な対応であっただけに実に応えた．シャノンの場合と同じく，その後長くコンプレックスとして残った．しかし，今振り返ればいずれも実に得難いレッスンであった．

伝統的な日本の宗教とキリスト教との接点を容易に見つけた，と話していられた先生の，み魂の安らかならんことを祈ります．